日本村落研究学会　研究通信

（NO.190　1998.1.18）

（事務局）酒井恵眞、内田　司、小内純子、＜札幌学院大学＞杉岡直人＜北星学園大学＞

〒069-0833　江別市文京台11番地　札幌学院大学人文学部社会調査室

電話（011）386-8111　内線4702　FAX（011）386-8113　eshin@sgu.ac.jp

郵便振替口座　02790-37542　日本村落研究学会

研究通信担当　杉岡直人　FAX（011）894-3690　E-mail：sugioka@hokusei.ac.jp

（1）新会長挨拶
（2）第45回大会報告・印象記等
（3）総会・理事会報告
（4）各種委員会報告
（5）会員動向・会費納入のお願い
（6）第46回大会・セミナー開催などの案内

【新会長挨拶】

村研のよき伝統を生かしたい

会長　綿谷　昂

ここ何年か、村研は大きく飛躍したと思います。その何よりの指標として、会員の若返りに成功しつつあります。また、とりあげるテーマも、国際比較、農村女性、環境問題、山村問題など、まさに現時点的課題を積極的にとりあげてきました。

私は発足時からの会員ではないのですが、それでもかなり長い間、そしてほとんど毎年出席してきたものとして、そのような活発な現在の村研の活動のなかに村研のよき伝統をさらに生かしてゆけば、いっそう豊かなみのりがえられるのではないかと思うのです。私が考える村研のよき伝統とは、およそ以下のような点です。

まず第一に、綿密なモノグラフにもとづく異なった学問分野の交流。有賀喜左衛門先生の石神村や中村吉治先生の煙山村をはじめ、村研メンバーは必ず自分のモノグラフをもっていました。研究発表も討論も、それにもとづいておこなわれてきました。そして、いうは易くおこなうは難い、異なった学問分野の交流、近頃はやりのことばでいえば学際的交流が続けられてきたのも、このモノグラフ主義によるものと思います。とはいっても、村研の議論でも実際はすれ違いに終わったことの方が多いといわざるをえません。まして、共通の結論を導くことができたことなど、ほとんどないといってよいほどでしょう。しかし少なくとも、具体的な事例をおいて議論することで、お互いの考え方がどこで、どう違うのかが明白になるということは、たしかにありました。これは大変重要なことと思うのです。お互いに相手との相違点を理解して、そして各自が自分の考え方の展開のために生かしてゆく。これは学問的討論の、一つのみのりだと思うからです。

第二に、歴史と現代との対話。村研はこれまでも、その時々の「時代の課題」に積極的に取り組んできました。しかしそれと同時に、その課題をつねに歴史とのかかわりでとらえる、という姿勢を保ってきました。例えば村研の古くて新しい問題である「村の解体」をとってみても、農業生産力の発展によってある段階の村が解体して再編されるということなら古くからあったわけですし、あるいは商品経済の浸透によって村が解体してゆくという動向なら少なくとも近世にさかのぼってみる必要があるわけです。このように、現時点の問題に取り組む場合でも歴史に位置づけることでそのことのもつ意味、意義が正しくとらえられるでしょうし、逆に現代的観点をもつことで歴史への切り込みも鋭くなるということがあるはずです。今後とも、村研の課題設定、討論は、歴史と現代との対話によって深めてゆくという方法をとってほしいと思います。

第三に、村研のそもそもの初心である家と村。この点については、もはや家と村ではなく、家族と地域社会として問題にすべきだという立場もあるでしょう。それはそれで、十分に論議に値する問題提起だと思いますし、また昨年の大会では、山村の、もはや一軒前の家としては成り立たなくなった老人世帯にとって互助の原理にたつ村の諸関係は福祉機能を果たしえないとする報告、あるいはそのような場合に村と自治体との中間範囲の地域を考える必要があるとの指摘など、家と村をめぐる重要な論点が提起されたと思います。私自身は、日本農業を守るためには今こそ家と村が大事だなどと、平成の農本主義のようなことをいっていますが、この段階で、それぞれが問題にするところを提示しあい、相違点は相違点としておさえながら、これらの概念のもつ意味をあらためて考え直してよい時期にきているのではないでしょうか。

それから上の点に含まれるかもしれませんが第四に、村研は村落社会研究であって農村研究に限られるものでないということ。村研大会で近年、農村や山村のお話はうかがっも、漁村研究の報告はほとんど聞けなくなったように思います。日本は島国ですから、里の民や山の民だけでなく、海の民が社会の不可欠の要素として役割をはたしてきたわけで、その歴史と現状の分析は重要な課題としてあると思います。研究が少なくなっているのかもしれませんが、なんとかお話をうかがえないものでしょうか。

村研はあと5年で、50周年を迎えます。その時にはぜひ学問的に意味のあるすぐれた企画をお願いしたいと思います。それまで、以上のような村研のよき伝統を生かしながら、積極的に新しい課題に取り組んで、研究の前進をはかっていただきたいものです。

（東北大学大学院情報科学研究科　hosoya@socio.is.tohoku.ac.jp）